

第2回「美術と教育を考える会」シンポジウム

日 時：平成25年7月13日（土） 午後3時～5時

場 所：中央区立泰明小学校 講堂

テーマ：「美術と教育を考える」～感性とは何か～

登壇者（敬称略、登壇順）

上野行一（帝京科学大学こども学部児童教育学科教授）

高村弘志（中央区立泰明小学校主任教諭）

近藤誠一（元文化庁長官）

日比野克彦（東京芸術大学教授、現代美術家）

山本豊津（東京画廊＋B T A P 代表）

司 会：野呂洋子（銀座柳画廊副社長）

野呂：本日はお忙しい中、またお暑い中を、泰明小学校にお集まりいただきましてありがとうございます。私は本日司会をさせていただきます銀座柳画廊の野呂洋子と申します。はじめに泰明小学校校長の和田利次先生よりご挨拶をいただきたいと思っております。

和田：泰明小学校の和田です。どうぞよろしく願いいたします。本日は第2回「美術と教育を考える会」を、泰明小学校で開催していただきありがとうございます。今回、この会の基本理念を読ませていただきましたが、「子どもの感性と創造性をはぐくむ」ということでした。こちらの会では美術を通してということですが、教育というものは感性と創造性を育てることだと私は理解しております。また、このような会を泰明小学校で行われることを大変嬉しく思っております。本日の会合が実りのある内容となりますことを祈念いたしまして、ご挨拶の言葉とさせていただきます。皆様おこしいただきましてありがとうございます。

野呂：ありがとうございました。さて、私どもの活動を多方面からサポート頂いております、「美術による学び研究会」の会長を務めておられる上野行一先生より、この会の趣旨についてご説明いただきたいと思っております。

上野：皆さん、こんにちは。今ご紹介いただきました上野です。さて、この会の趣旨ということ

ですが、基本理念をご紹介しますと「次代を担う子どもたちの感性や創造性を培い、美術を通してコミュニケーション能力を育て、生命力に溢れた活力のある子どもたちを社会に送り出すことが私たちの使命です」ということです。私たち美術教育関係者からすると、なんだ、当たりまえのことではないか、と思われる内容だと思うのですね。しかし一般の方々からすると、これが当たり前ではないのです。

アメリカの友人の話では、アメリカの小学校では国語と数学しかやっていないらしく、体育は遊びの授業のようにになっているし、美術は美術館に行くようになってきているということでした。私は今年の2月にニューヨークとワシントンに調査へ行ってまいりました。地域によっては小学校に美術の先生を配置する予算のない学校もあり、その代わりに美術館が予算を取って子どもたちの教育をするそうです。また落ちこぼれをゼロにするという取り組み（NCLB法）もされていて、その指針のテストが国語と数学だそうです。その成績次第で学校がなくなってしまうということもあり得るという。これは大変なことだと思っています。ところが日本でも大阪が似たような政策を出してきています。私たち美術教育関係者の中では当然だと思われる、感性と創造性の大切さですが、どうやら一般社会ではそう思われていないようです。日本でも国語と数学が大切なのです。そこで私たち美術教育関係者は、一般に広く、私たちの活動を知ってもらうことが重要なのではないかと思うように至ったわけです。実際に現在の小・中学校での美術の時間がこれからも確保できるかと言われれば非常に危うい状況なわけです。そういう背景がありますから、私は子どもにとって美術とは何かを考え、広く社会に美術の重要性を知ってもらおうと、5年前に「美術による学び研究会」という組織を発足しました。そこに銀座の画廊の方々から「美術と教育を考える会」という組織を立ち上げられたわけですから、美術教育関係者ではない方による運営ということで、これはぜひ応援しようと思っている次第です。「感性と創造性を育てる」ということについては、育てているかどうかは目に見えないものなのですが、しかしこれを言葉で伝えていかなければ、私たちの活動は実現しているとは言えないのです。非常に難しいとは思いますが、実現させなければなりません。本日、これから第2回「美術と教育を考える会」のシンポジウムに先立ちまして、皆様にこの活動の趣旨をご理解いただけましたらと思います。

野呂：ありがとうございました。それでは、この後、こちらの泰明小学校の図画工作専科の高村先生より、日頃の授業の実践をご紹介いただきたいと思います。その後、各界の方々によるコメントをいただき、会場から質問を受け付けたいと思います。まず高村先生、よろしく願いいたします。

高村：泰明小学校で図工を担当しております高村です。先程から日頃の授業のご紹介と言われておりますが、たいしたことはしておりません。皆さんは玄関からこの会場まで、子どもたちの作品が並んでいたのをご覧になりましたでしょうか？これから、私が授業で子どもたちに接している時の基本的な考え方を、作品を紹介しながらお話していきたいと思っております。

皆さんは、泰明小学校のすぐそばの大きなビルが撤去され工事中だったのをご覧になりましたか？工事現場の周りの壁に、子どもたちが消防車を描いた作品がずらっと並んでいたことに気付かれたでしょうか？京橋消防署より、学校選抜ではなく全員の消防車を描いた作品を出してくれと頼まれました。京橋消防署の方で選抜をして本庁に提出し、選ばれた作品でカレンダーを作るというのです。そしてできあがったカレンダーがこちらです。2012年度は辰年でしたので、タツの形の中に子どもたちの作品が並べられています。この首のあたりの作品、特に色の濃いところが泰明小学校の児童たちの作品です。この絵のタイトルは『働く消防』なんです。私は授業中いつも「人から頼まれて描く絵と、自分が好きに描いていい絵はちょっと考え方を変えなさい」と言っています。どういうことかということ、頼まれて描く絵は、頼んだ人が気に入る絵を描きなさいということです。この絵は、消防署の人から『働く消防』を描いて下さいと言われております。私が子どもたちに「働く消防ですから火事にしてしまいなさい。そして描いた絵を燃やしてしまいなさい」というものですから、真黒な絵を描いてくるのですね。でも、それが京橋消防署では好評らしいです。ですので、このカレンダーを見てわかるように、他の小学校の児童たちは明るい色の絵を描いておりますが、泰明小の児童たちは黒っぽい絵を描いております。

さて次に、皆様の席のまわりにある桜の絵をご覧ください。この桜の絵は、ここの小学校の1年生が3学期に4月に入ってくる新入生の為に描く絵です。だいたい1月～3月頃に次に入ってくる1年生の教室に飾る絵を描いております。タイトルは『春の絵』ということで描かせておりますが、授業では「春」をひっかけて紙を「貼る」ことで桜の花を表現することも教えています。皆様の後ろにも多くの作品を置いておりますので、よろしければ後でまたご覧ください。中でも面白いのは、皆が『桜の絵』を描いているのに、これなんか『イチゴの絵』しか描いていない、こちらは『山の絵』ですね。でも下の方にチューリップが描いてあり、本人は『春の絵』だと言いつけておりました。

たくさんの紙を貼って『“貼る”の絵』だという子どももおりました。他の作品と比べて、たくさん貼ってあるものですから2倍も3倍も重いのですね。また、この子は車を描いたり電車を描いたりしてマニアックなのですが、同級生に「お前、桜がないじゃないか」と言われると、「車の隙

間に桜があるんだ！」と言い張っておりました。こういう素晴らしい子もいます。また飛行機マニアの子もおりまして、飛行機ばかりを描いていて、最後に背景をピンクで塗って終わった子もいました。私の授業を見て頂くとわかるのですが、どんなに指導をしても自分の好きなことしかしない子がいるのですね。でも私は、それはそれでいいことにしています。困ってしまうのは、何を指導しても、先生が言ったことしかやらない子どもです。でも、子どもたちは色々な作品を描いてきます。

この子は、紙を貼って作品を作りましようと言っても、何も貼らなかったのですね。貼るのが嫌だったようです。友達に「何も貼っていないじゃないか」と言われてコーヒーの粉を地面のところに貼っておりました。桜の花を貼るのが嫌だったようです。友達からは「桜の花を紙で貼るんだよ！」と言われても、どうしても貼るのが嫌だったようで、青い紙をちぎって空に貼っておりました。でも、この子は僕の言ったことを自由に違う解釈をしてくれたので、それでいいと思っています。この作品、いい感じじゃありませんか？ でも、子どもたちは僕の授業を聞いて、僕の言葉尻をとらえて同級生を責めていくのです。それが困ったな…と感じています。

さて、次の作品です。この作品を描いた子は悪い言い方をすると、特別級ぎりぎりの子どもです。この子は、それこそ先生の言った通りのことをします。桜の花をピンクの紙をちぎって貼っています。空は青いんだということで、青く描いています。そしてできたのがこの作品です。本人はいたって満足しています。担任の先生は「やはり、この子はダメですかね？」と僕に聞いてきますが、この作品でダメということはないのですね。これはこれでいいのです。この子が感じたことを表現しているのですから。さて、次の作品ですが、この子も同じような子どもです。画面に紙を貼りなさいというと、なんでもかんでも貼ってしまうのですね。お友達の準備したものも取って貼ってしまうのです。なんでもかんでも貼ってできたのが、この作品です。でも、面白くないですか？ その人が表現するものにダメというものはないと僕は思っています。

さて、次にお見せするのは自由課題の作品です。子どもたちに、なんでも好きな絵を描いていいよ、題名を作品の裏に書いてね、というこのような作品になります。ご覧ください。桜の絵を描いた後に好きな絵を描くとこのようになります。この作品は4月27日に描いた作品ですが「楽しいクリスマスの日」です。桜の絵を描いた後でしたので、季節感のある絵を描きたいと思って描いたのが冬のクリスマスだったのです。

次の作品は夏の絵を描いています。そして、桜の絵で貼ることを覚えているので、何か貼りたい子どもは貼るのですね。この子は夏の雲を表現するのに「綿」を貼っています。どんな感じで描かれているのか、会場に作品が置いてありますので、ぜひご覧ください。

この作品群の中に3年生の絵が混じっています。3年生はこの間、画廊巡りをしておりますので、子どもたちの希望で紙粘土に絵具を混ぜてペインティングナイフで描いております。それがこの赤富士です。画廊に行っちゃったもんですから、すっかり画家気分になってしまって、赤富士など描いているんですね。

さて、次に立体作品を見てみましょう。この真ん中の黄色いのは何だと思いませんか？ こっち側にいるのが金魚なんですね。この作品の題名は『逃げ出す金魚』です。池から金魚が逃げ出すところを見ている作品です。そして、この子の前の作品がこれなんです、作品の題名が住所のようになっていたのでわかりづらいかもかもしれませんが、やはり池を表現しています。ご興味のある方はぜひご覧ください。工作の作品をはじめても、うちの学校では絵のようなものを作る子もいます。

うちの学校の図工の授業に見学に来られる方がびっくりされるのは、同じテーマで工作をやっている子もいれば、その隣で絵を描いている子もいることです。中には、どうして工作と絵を分けないのですか？という方もいらっしゃいますので、もしご意見のある方がいらっしゃいましたら後で教えてください。

次の工作作品です。これは『裏山に隠れている恐竜の景色』という作品です。私は基本的に子どもをほめませんので、この時は「この作品はあんまり面白くないね」と言ってしまったんですね。自分でも言ってから「あ、まずい」と思ったんですけど。要するに、この子は「面白くない」と言われたのでカチンときたらしく、次の制作では巨大で変わった作品を作ってきて「先生、どう？面白いでしょう？」と言ってきたのです。ご覧ください。すごくないですか？ 教師のひと言ってすごい威力があるんですね。こんなものを子どもに作らせるのですから。絵では無難な作品を描いてくるのですが、立体でこんなにすごいものを作ってくるのには驚きました。それも、僕の「面白くない」というひと言で、これだけのものを作ってくるのですから、教師の言葉には重大な責任があると感じています。この下に貼ってあるのはスポンジです。子どもたちが学校の備品のスポンジをちぎって工作に使うものですから、用務の主事さんから私はだいぶ叱られました。

次は『恐ろしい絵』です。どうです、皆さんどこかで見たことがあると思いませんか？ これはムンクの『叫び』からインスピレーションをもらった絵なんです。この絵を描いた時、このクラスでは『額縁を作ろう』シリーズがあった時なのです。ですから、絵の周りに木が貼ってあるんですね。また、なんで叫んでいるのだらう？ということでタイトルを見ると『はげまし』です。どういことかな…ということで様子を見てみると、これは家に不幸があつて1週間後くらいに

描いた絵でした。ものも言わずにずっと描いていたんです。それもムンクの画集をじっと見つめながら。何か感じるものがあったのでしょうか。私はなんて彼女に声をかけていいかわからずずっと見守っておりました。すると「先生、できた」と言って私のところに作品を持ってきたのです。その次に、その子が作った作品がこれです。立体の作品です。なぜか、サムライをつくってきたのです。そして次に、このサムライの立体作品を平面の絵にして持ってきました。描かれたモチーフの輪郭には穴があけてあります。暗いところで光を当てて見ると、穴から光が透けて絵が浮かび上がってきます。

また、うちの学校ではこんなこともやっています。オートバイを鉛筆で描いてもらいました。私の授業をご存知の方は知っていらっしゃるのですが、本校の児童全員がこういう作品を描いていると思ったら大まちがいです。興味のある子にしか描かせておりませんので、ご心配なさらなくてください。どういうことかということ、光と影を描くと線が無くても描けるんだよということです。暗いところを暗く描いていくとこうなるんだよ、ということを教えています。いわゆる光と影のデッサンです。これを子どもに教えてしまうのですね。子どもは、本当はこういう絵を描くつもりではなかったようですが結果こうなったようです。確かピカソが12歳くらいの頃に、足首というタイトルで描いたデッサンがあったと思います。このオートバイを描いた子は、そのピカソが描いたデッサンを見つけてきて「私もこういうのを描いてみたい」といって石膏の彫刻がないかと聞いてきたのですね。私はそんなものは図工室にはありませんので「とりあえず固いものを描いてみなさい。固いものの光と影を描いていきなさい」と教えました。固いものを描いている子は他にもいます。本人がやりたがる場合は基本的にやらせています。私の授業観察で来られた方に、その現場をお見せしたりもしています。校長先生、こういう子どもの絵を上手いと思われませんか？

和田：はい。

高村：やはり「うまい」と思われるのですね。私の周りにはいる、美術関係者ではない方が、こういう光と影で形を捉えたモノクロのデッサンを見ると「上手い」と思われるようです。言いかえると、一般的な大人の方がこういう作品を「上手い」と思うわけです。でも、子どもたちにしてみたら、やってみたら誰でも描けるじゃん、という意識なのですね。ピカソのように、「俺は上手い」と思った子どもはそのまま描き出すかもしれません。卒業生の中で、美術系大学に入った子どもと連絡をとると「先生、中学校と高校でやっていた美術って何だったのでしょうか？」と言

います。大学に入った途端、教授から「お前は何を考えているのだ？」と言われて、小学校の図工に戻っていますよ！」なんてことを言っていますね。美術系の大学にいても、デッサンは教わらないようですね。今日は大学で美術を教えていらっしゃる先生も来られているので、そのところも教えていただければと思っています。長い間ご清聴ありがとうございました。

野呂：それではここで休憩をとりまして、その間にご質問がある方は受付に提出いただきますようよろしくお願いいたします。

野呂：さて、それではお待ちかねのシンポジウムの時間になりました。ご登壇の皆様から、先程の高村先生の授業に対しての感想と、ご自分の美術の体験について一人ずつお話を伺いたと思います。

近藤：こんにちは。5日前まで文化庁長官をしておりました近藤誠一でございます。3年間、文化庁に在籍して文化・芸術の振興に携わってまいりました。その時に実感したことは、日本には素晴らしい文化・伝統、文化財など様々なものがあるにもかかわらず、それらのものが日本の一部の人のところに留まっているということが大変残念なことであると感じたことです。日本にある文化・芸術の力をもっと多くの日本国民が感じることができ、その力を日本中に浸透させることができないかと思案しておりましたが、なかなかその答えが見つかりません。

文化庁が予算を取って様々なプログラムをやっています。それぞれに素晴らしいプログラムをやっています。しかし、それが大きな力になっていない。芸術団体に助成をしたり、文化財保護のための修復をしたりと行動を起こしておりますが、何か今ひとつ物足りなさを感じています。学校と職場と家庭と毎日の生活の中にもっと芸術を浸透させて家庭の団欒の会話の中に芸術的な話が出てくるような、そういう社会を目指してもいいのではないかと思うように至りました。そうした中で最近、「芸術と教育」という考え方が広がってきました。芸術家を育てるための教育ではなく、子どもの能力を引き出す教育に芸術の力を使うということで、共感を抱いています。

それでは、これから何をしていけばよいかということです。たまたま最近知ったロンドン・シンフォニー・オーケストラ（LSO）で、音楽で教育をするということをされています。つまり、音楽家を目指すのではなく、バイオリンが弾けるようにするのでもなく、音楽を聴いたりバイオリンの音を出したりすることで教育をするという試みです。つまり、音楽を通して、様々なことを学ぶということです。これは、最近ブリティッシュ・カウンシルに参加してきた友人たちの報告会

に出席して聞いてきたお話です。彼らがいうには、オーケストラ団員が教師という発想ではなく、ファシリテーターという言葉を使っておりましたが、子どもたち一人ひとりの才能を引き出すことを目的にした授業ワークショップを行っているということです。それも、音楽を通じて。子どもの教育に音楽を活用し、ファシリテーターが子どもの学ぶ意欲とモチベーションを高めることによって、成長を促すことを実践しているということです。そこで、私が同様に「美術と教育」ということでも何かできるのではないかとある方に話したところ、パリのルーブル美術館でその種のワークショップをやっているということで、それを見せていただけることになりまして、先日パリのルーブルまで拝見しに伺いました。4歳から6歳くらいの子どもたちが13名程度ワークショップに参加しておりました。大きな作品の前で、先生らしきファシリテーターの立場の方が子どもたちと対話をしているのです。「この絵には動物がいるけれど、君たちの知っている動物はどれ？」というような会話を子どもたちとされておりまして。子どもたちは、思い思いの返事をしたり、動き回る子もいたりしましたが、1作品の前で20分程度会話をし、彫刻作品の前にも行ったりしながら、ファシリテーターが子どもから様々な言葉を引き出しておりました。彼らの中から将来画家になる子も育つかもかもしれませんが、このワークショップの目的は画家を育てるためのもではなく、ファシリテーターの力によってルーブルの作品を通じて子どもたちの未知なる可能性を引き出すことなのです。この目的を達成するのに最も適しているのが芸術であり、知識や記憶を重んじる学科ではできないのです。日本には学芸員という方々が多くいらっしゃいますが、これからは美術館にも鑑賞者とコミュニケーションのできるファシリテーターという人の養成が重要になってくるのではないかと思ったわけです。日本には、邦楽やオーケストラを鑑賞する劇場などの施設はありますが、それらが持つ魅力を伝える人が足りないのではないかと考えています。オーケストラや美術館側には、素晴らしい内容のものを提供していけばお客様が来てくれて経営が安定するという考え方があるようですが、その内容を分かりやすい形で伝える人がいなければ、素晴らしいものも理解されず人が集まらないのです。ですから「音楽と教育」「美術と教育」といった活動を通して、多くの人に鑑賞する楽しさを伝えるだけでなく、生活の中に取り込むことで人生を豊かに成長させることを体験する機会を与えられればと思っています。ということで、来週7月16日に文化庁主催で「アートで子供たちの才能を引き出す」というシンポジウムを政策研究大学院大学で開催いたします。お時間ある方はぜひご参加ください。音楽、美術、伝統芸能、演劇と各界で同じような意識を持っていらっしゃる方に参加していただいています。

さて、本日は富士山の話もしてくれというので、先日6月22日にカンボジアで世界遺産に登録

された、いきさつをご紹介します。この時、「三保の松原」は地理的に少し離れていたもの
すから、諮問機関より世界遺産からは除外すべきでないかという指摘がございました。確かに「三
保の松原」は山の一部ではありませんし、富士山を世界遺産登録するのに、どうして立地の離れ
た「三保の松原」と一緒に登録するのだという意見も理解できますので、仕方がないかな…とい
う思いでカンボジアに参りました。現地に入りまして、世界遺産の世界的な権威の方に私の古く
からの友人がおりまして、彼らに様々な事情を説明いたしました。確かに、「三保の松原」は地理
的には富士山から離れてはいるけれど、日本人にとって「富士山の絵」というと「三保の松原」
から望む富士山が親しまれているのであって、歌川広重や葛飾北斎の絵で我々日本人が親しん
でいる富士山は「三保の松原」と一体であることを関係者に伝えたわけです。外国人の彼らに伝
わるかどうかは不明でしたが、富士山と「三保の松原」との間には目には見えないスピリチュ
アルなつながりがあることを浮世絵の事例を使って説明したわけです。西洋文化の中には存在し
ないかもしれないけれど、これは自然遺産ではなく文化遺産であり、日本の文化の中にはスピ
リチュアルなものも一部あるわけで、富士山と「三保の松原」が一体となっているのだと説明
したところ、意外にも世界遺産の専門家たちが理解を示してくれたのです。そして、日本
の主張をもっと広く説明すべきだと激励していただきまして、その後のやりとりは省か
せていただきますが、様々なやり取りの末、無事に「富士山」と「三保の松原」が世界
遺産登録されたわけです。

大事なことは、私たち日本人にとって富士山は物理的に美しい存在というだけでなく、
長い歴史の中で多くの人々が富士山を眺めることからインスピレーションをもらい、勇
気をもらい、元気になり、その結果の一部として多くの芸術家はその姿を作品におさ
め、その富士山の姿を世界中に発信していったという目に見えない価値を認めてもら
ったということでしょうか。ですから、その中には日本人の精神性や美意識も当然含
まれているわけで、そのように考えれば「三保の松原」も世界遺産に含まれて当然
であるという主張が通ったわけですね。ですから、今回のことは世界遺産の権威
の方々、西洋人であり、西洋的な物質主義や合理主義の中で目に見えるものしか信用
しないという価値観の方々、私たち日本人の目に見えないものを信じる精神性を理
解してもらったということに大きな意味があると思っています。

このことに関連して「美術と教育」について考えますと、今の子どもたちに伝えたい
ことは感動すること、その感動をもとに大きなパワーをもらって何かを成し遂げること、
そしてその感動が人生を豊かにしていくこと。それらを教育の現場で伝えることが
できないかと考えています。今の社会では、「わあ、すごい」と感動することが少
ないように感じます。それよりも、知識を得て、高い偏差値の学校に就いて、要
領良くそこそこの企業に入って昇進していくことを目標にしてい

るような社会的風潮を感じます。

先程、高村先生の小学校3、4年生の作品を拝見させていただきましたが、素晴らしいですね。先生のご指導のもとに、子どもたちが表現していったものだと思います。彼らの絵からは、我々が持っている固定観念ではなく、我々が無くしてしまった自由な発想を見事に先生が作品の上で具現化させているようにも感じました。

また先程の打ち合わせでは、子どもたちは小学校の時は皆、美術が大好きなのに中学、高校と進むうちに苦手意識を持つ子が増えると伺いました。また、別の調査では日本人は中国人やアメリカ人と比べると、自分はダメな人間であると考えている比率が非常に高いという結果が出ています。小学校時代は海外と比べてそれほどでもないが、中学、高校と進むにつれて自分はダメな人間だと考える比率が諸外国と比べて増えているのです。その問題と、美術が好きな人が減っていくという問題は何か関係があるのではないかと考えています。

芸術というのは、人と違っていい。自分が人と違うことをすることを肯定するものです。絵が売れるとか、芸大の先生になれるとか、そういうこととは別に、芸術で大切なことは自分を肯定できることだと思うのです。一人ひとりに夢を与えることが、教育の中で、家庭の中で、職場の中で、地域の中で実践できないから、どんどん自分のことが嫌になり、美術のことも嫌いになっていくのだとされていて、それは我々大人の責任でもあると考えています。ですから最近思うことは、気がつかないうちに我々が固定観念を持っていて、それを周りに押し付けているのではないかと反省を込めて感じるわけであります。

例えば、先程ご紹介頂いた作品に「紫陽花が咲いている中に、くじらが泳いでいる」というような絵がありました。常識や固定観念からするとあり得ない作品ですけれども、本人がそれを表現したかったのです。また赤い富士山も、私の子どもの頃は富士山は三角形を描いて下の方はブルーに塗って上は白、と赤い富士はあり得なかったのですが、それはそれで面白い。こういう泰明小学校での美術の体験は、彼らが将来、研究者になっても、政治家になっても、財界にいったとしても、クリエイティブな発想を学校で肯定されたことが必ずプラスに作用するのだと思います。今、企業ではイノベーションというものが注目されておりますが、イノベーションとはこつこつ積み上げるものではなく、ひらめきというか、固定概念を打ち破って何かを創造することだと思います。ノーベル賞を取られた方も同じことを言っておられました。ノーベル賞を取るためには、ひらめきが大切で、科学の勉強をこつこつと積み上げるのではなく、ひらめきこそがノーベル賞につながるのであって、一番大切なものはその「ひらめき」であるということです。ですから、教育の中で常識や固定観念に縛られてしまわぬよう、中学、高校へ行く前にのびのびと美

術に触れさせることが必要なのではないかと思っている次第です。

野呂：貴重な体験に基づくお話をありがとうございました。では次に、日比野克彦先生にお話を
いただきたいと思います。日比野先生よろしく願いいたします。

日比野：「美術と教育を考える会」ということで、何をお話しようかと考えておりました。まず、
私は絵を描いています。その上で、「美術ってなに？」とか「実際現場ではどうなの？」というところから話に入っていければと思います。美術ってアートともいいますが、美術とアートは少し
違うと思うのですね。美術というと「術」の文字がついているように、技が必要というか、何か
伝承するための何かがあるような気がするのですね。ですから「術」という文字に縛られるわけ
ではありませんが、何か教科書が必要のようなイメージがあるわけです。そして「美」というと
「ああ、きれいだな～」というように、「科学実験」の中にも美はあるでしょうし、「あの人は素
敵だね」という人の心の中にも「美」というものは存在します。先程近藤さんがおっしゃられた
富士山というものの中にも「美」は存在するのですが、それは誰から教わったものでもなく、富
士山を見て「美しい」と思う心が文化遺産になったように、あれは非常にわかりやすく「美」を
感じるものなのだと思います。そこで「美術とは何？」と考えた時に、例えば舞台。人は何かを
見て感動した時に、それを誰かに伝えたいと思うわけですね。その伝える手段として、言葉であ
ったり、歌であったり、ここにあるような絵で表現する「美術」というものがあるのだと思っ
ています。ですから、こちらの会で、小学校のうちは美術が好きなのに、中学・高校・大学・社会
人と進むうちに「美術」と接する機会が少なくなるという話をお伺いしましたけれども、それ
は「美術」というものを「表現する」という意味におきかえて考えると実際に少なくなってくる
のだと思います。ただ、「美を感じる」ということになれば、日常にたくさんあるわけです。です
から、その部分の「美を感じる心」を「アート」と置き換える解釈も必要なのではないかと僕
は思うのです。

「美術教育」の中に「鑑賞」というものが出てきますが、この「鑑賞」というものもなかなか難
しいですね。先程も美術館に行って鑑賞というお話が出ていました。これは僕の例ではなく伺
ったお話ですが、「小中学校時代に美術の時間に美術館に行ったことがある人？」と聞くとほとん
ど手が上がらなかったそうです。僕の体験を振り返っても、美術・図工の時間に美術館に行った
ことはなかったですし、スライドを使って見たことがあったかな…という程度の記憶しかありま
せん。現実には、学校のそばに美術館があるのかとか、校外に出るための準備をする、というこ

とは大変なのですね。ですから鑑賞の時間を取るというのは実際にはなかなかできないのではないかなと思っているのです。というわけで「美を感じる心」を育てるといふか、日常生活の中で「あ、きれいだな」とか「素晴らしいな」と感じる機会を増やしていくことの方が大事なのではないかなと思っています。

僕は絵を描いていて、展覧会をやって、公開制作をやります。公開制作をやっていてよく感じることは、「見ている人がいる」ということなんです。絵というのは、作家のものではなくて、そのあと所有した人のものになるわけです。絵を見て「ぞくぞくっとする」という感じる力は、絵を描いている人の力なのではなくて、絵を見る人の鑑賞する力が感動させているのです。ですから、僕の評価は僕の力ではなくて、鑑賞する人の鑑賞する力が評価してくれているのです。美術というと「描く人」「描く力」というところに価値がいくようですが、本来は「見る力」「鑑賞する力」が作品の評価を決めているのであって、「美しいと感じる心」を持っていれば、それは日常生活の中で充分鍛えることができるのではないかなと思っています。

では、「美術」ってどのように教育するの？ということについて。スペインに「アルタミラの洞窟」がありますよね。世界最古の絵画といわれているものです。僕はその「アルタミラの洞窟」を見てみたいと思ったのです。正確にいうと、洞窟ですから、その絵を見たいというよりは、大昔にその絵を描いた人がいた場所に立ってみたいと思ったのです。つまり、そこに立つことで、その絵を描いた人と同じ疑似体験ができるわけです。世界最古の絵を描いた人はどんな人だったのだろうか、どういう気持ちで描いたのだろうか、そこに立つと自分は何を感じるのか、を知りたくてアルタミラの洞窟に行ってきました。

洞窟というのは真っ暗なんですね。外の暗闇と違って星や月があるわけではないので、いつまでたっても真っ暗です。なぜ真っ暗なところにいるのかというと、動物などの敵から身を守るために逃げ込んだのではないかなと思うわけです。そして真っ暗闇の中から絵画が生まれたのです。今は夜でも電気をつけて明るいところで絵を描いています。昔、絵画が生まれたところは暗いところですよ。そして暗いところだからこそ創造力が生まれた。その創造力という目に見えないものを、目に見えるようにせざるを得なかったのです。そしてそれこそが人間が絵を描く動機だったのではないかなと思ったわけです。そして、その絵を見て僕は「上手い」と思ったのです。そんな2万年前の人が描いた絵を見て「上手い」と思える自分にまた感動したのです。どういうことかという、2万年前から人間というのは進化していないのです。2万年前の絵を見て感動するのですから。つまり「芸術」は進化していないのです。教育しても無駄だということです。でも、進化していないからこそ「芸術」はすごいと思うのです。2万年前とはいわず、ここ1000年2

000年くらいの期間でみても、科学でも医学でも都市でも多くのものが飛躍的に進化しています。でも芸術というのは進化しないのですね。その証拠に2万年前に描かれた絵を見て「すごい、上手い、どうやって描いたんだろう？」と感動することができるのです。ですから美術とかアートは教育できるのか？という点では、材料的なものとか、テクニク的なものなどは教えることができるかもしれませんが、「美しいと感じる心」とか「感動を伝えたい」と思う気持ちは変えられないものだと思います。ですからそれを教育することは不可能であると思っています。先程拝見した子どもたちの絵からわかるように「美を感じる心」「それを伝えたいと思う心」は昔から変わることなく子どもたちに備わっています。ただ、それを何で表現して、どのように伝えていくかということについては、今この銀座でないとできないことがあると思っています。

野呂：素敵なお話をありがとうございました。美術や芸術は進化しないということに大変感銘を受けました。それでは、次に私の尊敬する東京画廊の山本豊津社長にお話をいただきたいと思います。

山本：私たち銀座ギャラリーズは、司会をされている銀座柳画廊の野呂さんや、そちらにいらっしゃる靖山画廊の山田聖子さんと私を含めて40軒で活動しています。この活動は、銀座の街と何ができるだろうかと考えたところから始まりました。泰明小学校の児童たちとはギャラリーツアーを通してご縁ができました。

子どもたちと触れ合い、この「美術と教育を考える会」というものを立ち上げました。「美術教育」とせず「美術」と「教育」に分けたのがミソです。日比野先生のご指摘どおり、美術は教育できるものだろうか？との疑問を私たちも持っていて、もしかすると違うかもしれないと。逆に、教育と正反対のところに美術があるのかもしれないという思いがありました。

先程、実際に美術の授業をされていていらっしゃる高村先生のお話を伺っていて、子どもたちと先生が学校でされていることはコミュニケーションだと思いました。教育は、読み書きそろばん、また歴史も先生から生徒へ一方的に情報を伝達することですが、高村先生の授業が面白いのは、先生が子ども一人ひとりにあれこれ言っている点です。高村先生の美術の授業は、双方向のコミュニケーションなのです。多分、子どもたちと人間的な関係ができているのだと強く感じました。例えば、先生に何か言われても「僕、次はこういうふうに、頑張ってみるんだ」というように、先生と子どもたちとの間にコミュニケーションが成立しています。

先程、日比野先生も少し触れていましたが、人間は、何かを他者に伝える時、文字より先に絵を

描きました。子どもは文字より先に絵を描きます。例えば、小さな子どもにお母さんを描かせる
と、頭を大きく描き、手足をつけて二頭身の絵になります。それはお母さんとの距離です。お母
さんの顔が自分の目の前にあるので大きく描きます。成長するにつれてお母さんと離れるのでお
母さんの顔が小さくなって八頭身に近づきます。お母さんやお父さんの絵を描くということは、
文字を学習する前に行われる親とのコミュニケーションだと思うのです。洞窟の中で絵を描くこ
とも、文字を持つ前のコミュニケーションで、これは太古から変わらないことで、改めて「絵」
は面白いと思いました。

さて次に重要なことは「美術」と「教育」をどのように考えるかです。私たちは美しいものを見
て、美しいと感じます。ではなぜ美しいと感じるのでしょうか。そして美しいと感じる人生は
大切だと思いませんか？ 先人たちは何に「美しさ」を感じたのか、そして何を「醜い」と感じ
たのか。例えば、藤田嗣治が戦争画を描いていますが、何を美しいものとして、何を醜いもの
として描いたのか。先程、近藤長官がファシリテーターのお話されておりました。ファシリテ
ーターの方々はこのように絵を見なさいというガイダンスはしない。たくさんの絵を見せて、考える
ことをさせます。先人たちが何を美しいと感じたのかを考えることです。その考えることが、
先程高村先生が授業でされていたコミュニケーションによって触発されます。この考えることが、
学校の授業で、または私たちの日常生活で本当に行われているかどうかということです。

例えば、今、参議院選挙を控えておりますけれど40%の人が投票に行きません。大人たちが日々
の暮らしの中で自分たちの生活のことを本当に考えているのだろうか？ 子どもたちはそれを見
ていると思います。間近で美しいものが見られること、街に素敵な先輩がいることは大事なこ
とだということです。私たちがお手本にしているのは、サン・モトヤマの茂登山会長です。とにか
く洒落ています。会話も洒落です。こういうことが私にとっての美しさなのです。銀座という
ところは大人が美しく歩いている、そして子どもたちも憧れ、そういう人と出会うことで美しさは
伝承されていくものだと考えています。

さて、美術の役割は、人類が文明をおこして1万1千年の間にそれぞれの時代の人々が「美しいと
感じた」ことを形に残してきたことです。その残されたものを鑑賞することが教育の目的になり
ます。中学・高校と進む途上で人類が美しいと感じたことを知ることによって、自分の人生を豊
かなものにすることができると私は確信します。

先程、近藤長官が、「三保の松原」のご説明で浮世絵を各委員会の方々にお見せになられたとおっ
しゃいました。多分、僕が想像するに、外務省時代の知り合いがそのメンバーにいらして、先方
も近藤長官の話ならを聞いてみようと、そこには既にコミュニケーションのインフラができてい

たのだと思います。近藤長官が各委員に見せた浮世絵は、世界の人が知っている日本を代表する美術的資源です。この富士山の浮世絵が効いた。富士山の写真を持って行ったのでは、各委員会の人たちを説得できなかつたのではないかと考えています。国際的なインテリジェンスのある方々は皆さん、広重や北斎をご存じですから、強い説得力を持ったのだと思います。

つい最近、銀座の旦那衆たちが「やっぱ銀座だっぺ」という東北の被災地支援をする活動を立ち上げました。私も陸前高田に行ってきました。皆で「銀座百点」(フリーマガジン)の座談会の折に気がついたのですが、岩手県のリアス式海岸を地元の人たちは美しいと思っていないようなのです。その理由は、彼らにとってリアス式海岸は生産の場なのであって、美しいと感じている余裕がない。15メートルの堤防をつくることに「美」はありません。仙台から北で美として残っている遺産は藤原三代の文化だけです。美しさの対象となる絵が少ないのは、自然を見て美しいと感じる他者があまり訪れておらず、美を見る目が育たなかつたからです。

一方で富士山に関してですが、古いものでは平安時代に描かれた、富士山を背景に聖徳太子が馬に乗っている不思議な絵があります。昔から富士山は美しいものだとして、様々な絵が残され、その蓄積を学習して私たちは富士山を美しいと感じるようになったと思います。

そこでひとつ提案したいのは、日比野さんのワークショップを児童・生徒に見せることです。日比野さんのワークショップを見て、子どもたちは日比野さんの制作が芸術かどうかということよりも、日比野さんのやっていることに興味を持つと思います。子どもたちにダ・ビンチの絵を見せても何の意味もないので、まず子どもたちには現在最先端でやっている人たちの仕事を見せることが一番理解しやすいと思います。そんな感じはしませんか？ 一番先端に立つ美術を大人は否定します。なぜならば、大人は既成の美術として見るのでわからないからです。子どもたちは日比野さんが遊んでいるという視線で見るので楽しそうに感じます。今、僕の目の前にある子どもたちの作品を見ていると、現代美術の種になるものが山のようにある。子どもたちの作品も部分部分では十分に楽しめるのです。これをどうやって美術に仕立て上げるかがアーティストの仕事です。そこで銀座ギャラリーズは子どもたちの才能を解放する場所として銀座で何か提供することができたらと思っています。

野呂：ありがとうございました。私たち銀座ギャラリーズで支援することができたらいいなと思います。さて、最後に、美術の教育の専門家でいらっしゃる上野先生からお話をいただきたいと思っています。

上野：ご紹介いただきましてありがとうございます。先程、高村先生の授業内容を拝見させていただきました。そこでこの作品なのですが、高村先生は「木」というテーマで子どもたちにこのような作品を作らせています。まず、この子は「木」を描いています。わかりやすいですね。面白いのはこの子の作品です。画用紙に、物理的に木を貼っています。実際の木を貼ることで「木」を表現しています。つまり色々な方法で木を表現できる授業をされたのです。これは題材の設定も良いのですが、先生の側に「木」というものの固定観念があると、子どもたちはこういった作品が作れないのです。

そして私は、小学校4年生の時に受けた嫌な図工の授業を思い出しました。粘土で大切なものを入れる箱を作らしようという授業がありました。先生の頭の中にはジュエリーボックスのようなものがあつたのでしょ、箱の周りに装飾があつて、色々なものが描かれているものを想定されていたようです。まあ、たいていの子どもはそういうものをイメージし、特に女の子などは、まさしくハート形のそういうものを作つたりしておりましたね。その時、私にとって大切なものって特になつたのです。また、当時はホラーブームでして吸血鬼だとか幽霊だとかが流行ついたので、私は棺桶を作つてその中にミイラを入れたのです。自分としては力作のつもりでしたが、それを見て先生がえらく怒りましてね、ひどく叱られた覚えがあります。私としては、大切なものとしてミイラ、そしてそれを入れる棺桶ということで、ツタンカーメンのようなものをイメージした大切なものを入れる箱だつたわけです。ですから、先生次第でこうも変わるのかということ、高村先生の授業を拝見して感じたわけです。つまり、先生が固定観念をもって「木」というテーマを与えると、全員がこの子の作品のようにわかりやすく1本の木を描く、このような作品の近辺に収斂されるのだらうということ。それに対して、高村先生の授業では子どもたちの幅広い創造力を引き出している、ということが、子どもの作品から見てとれるわけです。このように工作した作品が出てきてもいいわけですよ。しかも、現在の文部科学省の学習指導要領がそうなつているのです。授業全体の流れによつて平面になつても立体になつても構わない。では、全国で行われている授業がそうなつているかということ、実際にはそうはなつておりません。東京都の皆さんにはピンとこないかもしれませんが、東京都は全国でもまれな、小学校で図工の専科の先生が教えることになつている地域なのです。これが地方に行きますと、学校担任が全部教えちゃうんです。図工も体育も算数も国語も。そうなるとう事情が違つてくる。先程高村先生がされたような授業は全国でどこでも同じように見受けられる内容のものではないのです。むしろ、全国ではそうではない授業の方が多いたが実態だと思ひます。どういふことかと申しますと、先生の美術観といふか絵画観といふものがとても狭いのではないかということ。す。

それは先生の責任でもあるのですが、その先生が受けてきた教育の責任でもあるわけです。つまり子どもの頃から美術を十分に観る経験をされてこなかったのですね。今でもそういう部分はありますけれど。図工の時間というと、絵を描いたり工作したりする時間が中心で、鑑賞の時間がほとんどない。先程、日比野先生がおっしゃっていましたが、小学校、中学校ではほとんど絵を見る機会を設けていないのですよ。そうするとどうですか、美術館はテレビでやっていたから行く、話題になっていたから行ってみる、NHKの日曜美術館でやっていたから行ってみる、そういう動機で美術館に行かれる方が多いのではないですか？ 本当に美術が好きで、関心があって、心からその絵を見てみたい…という動機で美術館に行かれる方は極めて少ないのではないかと考えています。まあヘビーユーザーの方がいらっしゃるから、それなりに美術館の入場者はおりますが、統計で算出された結果によると、ヘビーユーザーのカウントを除いて計算をし直すと、ずいぶん数字が落ちるのですね。

やはり小学校の頃から充分に作品を見る経験をさせないといけないのかなと思います。低学年の時代は難しいかもしれませんが、高学年になったらかなりの時間を鑑賞の時間に割いてもいいのではないかと。それこそ、中学、高校に進むにつれ鑑賞の時間を増やしていった方がいいと思うのですね。もちろん、絵を描いたり、立体を作ったりする、それも大事なのですけれども、現実的には多くの方が社会人になった時、見る側に回るわけじゃないですか。市民として美術を愛好するということは、ほとんどの人が鑑賞する側になるわけで、その素地を育てるためにも小学校・中学校の時から鑑賞に力を入れることで日常的に美術に触れ、美術の会話をすることで、将来的に文化的な生活を送る素地を育むことになるのだと思うのです。

先程、近藤長官がルーブル美術館で小さな子どもたちが鑑賞教育を受けていたとおっしゃっていました。私は15年ほど前、対話による鑑賞教育を目指し、絵を囲んで鑑賞する授業をやっているという運動をはじめました。今はかなり根付いてまいりました。国立の美術館はもちろん、大原美術館、ポーラ美術館など新旧の私立美術館から県立美術館まで教育プログラムを私どもで集め、いくつかのプログラムを作ってきたのですが、結構いいものができていますよ。しかし美術館の方にお伺いすると、学校の先生向けに素晴らしいプログラムが用意されているのですが、案外使われていないのだそうです。利用率が低いと言われます。学校の先生からしたら、なかなか美術館にいく時間が取れない、美術の授業としてだけでは動きにくい、学校行事としてやるか他の科目の授業と合せてやるしかない等、色々な事情があるわけで、この問題は校長先生を筆頭に学校のプログラムとして作っていかないとなかなか難しいのではないかな、と思っています。この間アメリカに調査へ行ったのですが、面白い体験をしましたので事例としてお伝えいたしま

す。ニューヨークのMOMAに朝の8時半（開館前）に集合と言われまして、ちょっと大変だけれども行ってみました。後から知った話ですが、これはアーリーバードといって普段からやっているプログラムだそうです。作品を見るにあたり、私たちの時は、「今日のテーマはキャラクター（性格）です。それを頭に置いて、これから作品を見ていきましょう」と言われました。最初に鑑賞したのはロダンの「バルザック像」です。バルザック像を見ながら自由に意見を言うわけですね。頑固なおじさんだな～とか、少し身体を反らせているので偉そうに見えるとかね。そういう会話をもとに、いわゆるファシリテーターの方が、この人はこういう方だったのでしょかね、とまとめてくださるのです。次の作品は2階にあったアンディ・ウォーホルの「マリリン・モンロー」でした。それはマリリンがひとつだけ描かれている作品でしたが、それを見てまた自由に思ったことを語るわけですね。塗られた面がドアのように見えるので向こう側から覗かれているように見える、とかね。私たちもマリリンの作品は色々知っているわけですから、複数のマリリンの作品と比べるとこの作品はキャンバスの中にひとつだけぽつんと小さくあるので寂しそうな感じがする、とか発言するわけですね。するとまたファシリテーターの方が、この人のキャラクターはこうこうこう…と私たちの発言をまとめてくださる。最後はバーネット・ニューマンという作家の、ほとんど赤一色の抽象作品でした。幅5メートルくらいある大きな絵の前で、いきなりこの人のキャラクターは？とくるわけですね。えっ？これは人ではないし…と動揺していると、これが人だとしたらどうですか？とくるわけですね。そこでまた考えるわけですね。赤だから情熱的かな…とか、皆さん苦心して話すわけですね。そして最後にファシリテーターの方がまとめをしてくれるのです。キャラクターというものはニューマンの作品でもわかるように、皆さんが作り出しているものではないですか？ 皆さんが、この人はこういう人であるという性格を作り出してその人を見ているのではないですか？と。やられました。美術を鑑賞するということは、単にその作品について思いめぐらし理解をするということだけではなく、もっと幅広い日常の中にある普段私たちが意識をしない考え方や振る舞いですね、それに改めて気付かせてくれる、それこそが本当の意味のアートの役割、美術作品なのではないかと思うのです。そういう経験をしまして、改めてアメリカの鑑賞教育は一步も二歩も先を進んでいると思ったわけですね。子どもの時からアートに親しみ、大人になったら美術を通して様々なことに思いを馳せることのできる、そういう文化を日本にも作っていききたいな…と、今回の調査を通じて思うようになりました。

野呂：ありがとうございました。私たちも協力して上野先生がおっしゃるような文化的な日本を作っていきたいと思います。

さて、それでは会場の皆様から様々な質問を頂いております。全てにお答えすることができないことを先にお詫び申し上げます。

まずは高村先生への質問をまとめて3つさせていただきます。会社員20代の女性からの質問です。先生のお話をお伺いさせていただいた中で疑問に思ったのですが、なぜ子どもたちの作品をほめないのでしょうか？

次は品川区の先生からの質問です。子どもたちは、やる気になればなんでもできると思います。

高村先生は子どもたちをほめないで、どのようにしてやる気のスイッチを入れているのでしょうか？

次は50代の方からの質問です。ムンクに触発された作品に興味を持ちました。ムンクやピカソを小学生に見せるケースがどれくらいあるのか知らないのですが、他の学校でも授業で芸術家の作品を見せているのでしょうか？ また、それは実際に子どもたちの新たな創造性にどのような形でつながっているのでしょうか？ ということです。

高村先生よろしくお願いいたします。

高村：はい。嫌なところを突かれました。校長先生は必ず、ほめて育てなさいとおっしゃるのですね。でも、ほめるとダメなんです。例えば、僕がこの作品をほめるとしますよね。そうすると、子どもたちにとってこれがお手本になってしまうのです。そして、その子が先生になってしまうのです。他の子も全部ほめれば良いのですが、そんな暇はありませんし、序列ができてしまいます。もちろん部分的にはほめますよ。ここがいいね、ここがきれいで素敵だね、と。でも子どもたちの多様性を引き出すために、全体をほめるようなことはあえてしないようにしています。誰の絵もほめませんから、絶対的にダメな絵は存在しないことになって思っています。また、子どもたちには率直に評価のことも話しています。算数や国語みたいに点数が出るものではないですから、君たちが作品を作っている時の顔とか、何を考えているのかを先生が見ながら成績をつけているんだよ、と言うと、子どもたちは「えーっすだ、そんなことはわかるわけない！」と言うのですが、ここには多くの先生がいらっしゃるのだからわかると思いますが、子どもたちの顔を見ていれば、真面目に取り組んでいるのか、ふざけて作品に取り組んでいるのか、だいたいわかりますよね。図工・美術の評価に関しては、その意識の問題だと僕は思っています。そういうことで、評価はできてしまうのです。ほめないということが気になっていらっしゃるようですが、部分的にはほめておりますので、ほめていないわけではないと思っています。一生懸命取り組んでいる子の態度は思いきりほめますよ。部分的にはほめています、ということで答えになっ

ておりますでしょうか？

さて次の質問ですが、ピカソやムンクを見せているかということですが、教科書にピカソの気持ちになって絵を描こうとか、すごい題材があるのですよね。こちらに教科書会社の方もいらっしゃるようなのですが、ムンクの気持ちになってとか、すごい題材があります。でも私はその授業はやりません。なぜならば、そういう授業はやっても面白くないからです。名画の一部分を貼って、ここから広げていきましょうとかありますが、私にとっては面白いと思えないのです。すみません、ちょっとここで授業をやってもいいですか？ 例えば、3年生がこの間、画廊巡りに行きましたが、画廊巡りに行く前に子どもたちに、一点透視図法という遠近法を教えました。遠くにあるものを小さく描いて、このように描くと、上手く見えますよね。でも、子どもたちには「君たち、これから行く画廊にはもっと違う絵があるんだよ」と教えてから行きました。その指導中に授業でピカソの『泣く女』を見せました。すると、児童が「その絵は変だ」と言いました。変だと君たちは言うけれど、どうして変だかわかるかい？と聞くと「わかりません！」と答えます。そこで、僕が「ピカソの絵が好きな人？」と聞くと一人ぐらいが「おもしろ〜」といって手を挙げます。その次に、写真のような写実の作品を子どもたちに見せると、「この絵は好きか？」と聞くと「お〜これは大好きです」と多くの子どもが手を挙げます。そこで、ピカソがどうして「泣く女」を描いたか説明します。前から見た目があったり、横から見た鼻があったり、斜めから見た唇があたりするが、ピカソは人の絵をバラバラにして、その部分部分を様々な角度から描いたものを組み合わせているのだと。そして説明しながら図解にして子どもに描いてみせてあげるのです。すると子どもは「お〜ピカソの絵になってきた」と喜ぶのですね。その後で「じゃあ、ピカソの絵が好きな人？」と聞くと多くの子どもたちが「はい！」と言って手を挙げます。この変化はなんなのでしょう？ たった5分で多くの子どもがピカソの絵を好きになるのです。お家に帰ってピカソの絵のことを聞いてきてもらおうと、お家の人もピカソがそうやって絵を描いていることを知らなかったと言います。こういうことを子どもに教えていいのかどうかはわかりませんが、それでピカソが好きになればいいのだと僕は思っています。ですから、ピカソの気持ちになって絵を描こう、という題材はやっておりませんし、全国でこういう授業をやっているかどうかはわかりませんが、僕のやっている授業でピカソが嫌いだった子どもが好きになってくれるのであれば、それでいいと思っています。これが、質問された方の答えになっているかどうかはわかりませんが、僕はこういう授業をやっています。そして色々な絵を子どもたちに見せていきます。

色々な絵の中で、マグリッドの絵は面白いですよ。靴の先が本物の人の足になったりして笑っ

ちやいますよね。子どもたちは、そんな作品が大好きです。子どもに評判がいいのはルノワールです。そのくせ、「先生、これボケてるよね！」というのです。失礼ですよ、ルノワールの絵に「ボケてる」だなんて。でも子どもはルノワールの絵とかセザンヌの絵が大好きです。こんな感じの授業をしておりますが、答えになっておりますでしょうか。

野呂：ありがとうございました。

上野：少しよろしいでしょうか？ 子どもの作品をほめる、ほめない、というのがありましたので、少しお話させて下さい。私はほめるんですよ。ただし、全員ほめます。例えば、「ここ、上手くやったね。難しかったらう？」とかね。「今できたここがいいね」など、ポイントをほめます。全体をほめると先生の価値観が反映されますからそれはしません。でも、個別に一人ずつ全部ほめます。見方を変えると、絵はほめないで、その子をほめるのです。大学で授業をしていて「いいね」とほめたりすると、「先生、ほんと？」とか言うんです。「ほんとにいいよ」というと、じっと下を見てうつむいているんです。で、良く見ると涙ぐんでいたりするんですね。ずーっと図画工作が苦手だった生徒だったらしく、初めて僕にほめられたというのです。そんなこともありました。ですから、高村先生のやり方もひとつのやり方。僕のやり方もひとつのやり方なのだと思います。

野呂：上野先生ありがとうございました。あと2つの質問にお答えしてから、最後に近藤長官にまとめていただきたいと思います。

次の質問は40代の派遣の男性からです。学校の授業で美術を教える、ということは点数をつけてランクをつけなければいけません。結果的に「お写真」みたいに描ける絵に高い点数がつくのが当然かと思いましたが、泰明小学校では別の基準があるようですね。しかし、現実には「お写真みたいな絵」を評価する先生が多いのが実情なのではないでしょうか？という質問です。この質問には、日比野先生と山本豊津さんにお答えいただきたいと思います。

日比野：これは大学の学生への評価ということでしょうか？ 僕は大学生を作家の卵として見ておりますから、芸術家同士ですね。芸大には18歳以上の子が入ってくるわけなので、芸術の世界でいえば同世代の作家と思って接しています。

今回の質問は小学生の評価ということですね。先程、高村先生のお話を伺いましたが、僕がワー

クショッブをやる時に、同じ年代の人しかいないとやりづらいなと感じます。サラリーマンもいる、お年寄りもいる、大学院生もいる、といった様々な世代がいる場合は、自分を隠すことなく、作品を展開させることができるのですが、同い年しかいないという場合は動きが難しいですね。それを考えると、小学生1年生しかいない、という環境で美術を教えるというのは大変なことだと思います。しかも1時間目に国語で答え合わせがあって、2時間目が図工で、3時間目が算数で答え合わせがある、という環境の中で、どうやってスイッチを入れ替えるのかと思います。今、東京都は専科の先生がいるけれども、東京以外では全ての教科を教えているというお話も伺いました。難しいですね。

話をごまかすわけではありませんが、美術の授業を美術館で、というお話が先程から出ておりましたのでお伝えしたいのですが、今年から上野の文化施設による「museum start あいうえの」という連携事業が始まりました。それより以前から、隣接しているにもかかわらず今まで全く連携がなかった東京都美術館と「とびらプロジェクト」を始めていて、「とびラー」というアートコミュニケーターを組織していました。最初に都美館を応援してくれる一般の方々を募集したのですが、ボランティアとはいえやりがいと居場所を見つけることのできる企画ということで、80人程度募集のところに300人も応募が来ました。今年は2期生ということで180人くらい来ていただいています。その方々に中心になってもらって「museum start あいうえの」を運営してもらっています。芸大で教えきれない部分、学校の中でやりきれない部分を、そういう形で美術館が補完するようになってきております。芸大の中でも美術教育という授業があるものの、作家が教師というケースが多いので難しいところが色々あります。なぜならば、自分が作家として活動することと、美術を教えるということは全く別の仕事だからです。ですから、芸大といえども、そのところをきちんとしなければいけないということで「museum start あいうえの」が立ち上がりました。そういう意味では少しずつですが、鑑賞について東京芸大もきちんとやっていこうという方向になってきています。

野呂：素晴らしいことですね。ありがとうございました。それでは山本豊津さん、よろしく願いいたします。

山本：私も日比野先生と同じで、コレクターを別にすると日常的に接するのは画家や彫刻といったそれで食べているプロです。その他、月に何人かの方が作品を見てほしいと私の画廊を訪ねて来ます。私は、高村先生と似ていて、全員に辞めなさいと言います。それでも3回以上来る人は、

才能がありそうな感じがします。それはどういうことかと言いますと、私のところに来るほとんどの人は自分を見せるために作品を持って来るのですが、私はその人自身には興味がありません。重要なのはその人が美術をどのように考え、どのように作品を作ったかということです。歴史を含め美術の話ができる人でないと、プロを目指して進めないのです。今日、高村先生のお話を聞きながら子どもたちが制作したものを拝見しましたが、これらは美術ではないのです。絵を描いているということと美術とは違います。絵を描くことによって、自分を見てください、自分を知ってくださいということに対しては点数をつけられないと思います。プロになるということは、第三者に対して説得力を持っていなければいけないということです。ピカソの絵は説得力があるから高村先生が説明すると子どもたちは理解するのです。絵が売れるのは、他の人が買うだけの価値がその作品にあるからで、自分を見てくれというのではなく、制作が半歩でも今までの美術から先に進むことができているかどうかが重要で、それを私は美術としています。その違いがなかなかわかってもらえません。小学生はプロを目指すために美術の授業を受けているのではないので、自分が感動したこと、例えば自分が雪に触れて感動したことなどを表現する方法を学べれば良いのです。それが自分を見てくれということです。ですから小学校低学年の作品はすべて面白いですし、知的障がいのある人や、生まれながら全盲の人の彫刻とか、彼らの作品は物に出会ったり触れたりした時の感動をダイレクトに描写するから、もしかするとプロの画家よりも強い表現が突然現れます。ただし、それを継続させることが難しい。気分がのらないと全くダメ。小学生もそうです。低学年の時は感動がそのまま絵に表れますが、高学年になって文字教育が進むと絵がつまらなくなってきました。それは絵が技術的になってくるからです。例えば先程のピカソの絵は技術的なものを意図的に見せないようにできています。ものの見方を提示しているわけで、そういうことが社会の中ではなかなか理解されていません。ですから私は画廊に訪ねてきた人には、とりあえず全員辞めなさいと言います。今まで来た人で3年半、私と喧嘩しながら通った人がいます。何がすごいって、3年半通うことがすごい。通常は1回言われると2度と来ません。それを3年半通う、やむにやまれぬ何かがあるわけですね。それを私は引き出してあげたいと思っています。高村先生、学校の美術の授業で成績をつけているのですか？ それは、技術の点をつけるのですか？

高村：評価の観点は4つあります。まずその子の興味、関心、態度、やる気です。その次は創造性、その次は技能、そして鑑賞力、この4観点です。僕たちがいう技能というのは、学校の先生が教えた技能、方法を使っているかどうかという見方が大きいですね。無視する子どももいま

すからね。上手い下手ではないのです。教えたことを実践したかどうかを判断基準にしています。ただ、僕が教えた技術ではなく、本人が全く新しい技術を編み出したら、それはそれで評価します。鑑賞は先程お話したとおりですが、違う鑑賞法も認めるようにしています。鑑賞はコミュニケーションです。違う人の違う考え方を認めるのが鑑賞ですから、そういう観点で評価するようにしています。先程話したように、ピカソが嫌いだった子が、話をするると大好きになったりしますよね。それも、興味・関心・態度、やる気に含まれます。ですから、それぞれに評価もつながっているのです。一番難しいのは『玉入れの絵』とか『芋堀りの絵』。採点しようがないですよね。先生に好かれようとして描いているような感じがします。ふつう芋を掘っていたら、芋だけしか見えないじゃないですか。それなのに芋を掘っている自分を描くんですよね。こういう課題は僕にとっては難しいです。教科書屋さん、すみません。僕は、教科書の課題は難しいです。

野呂：ありがとうございました。いかに美術の評価は難しいかということと、日比野先生、山本さんがおっしゃっていたように、アートで食べていくのが大変だということを改めて再確認させていただきました。そして、美術の先生方におかれましては、美術を評価することが難しい中で点数をつけなければいけないという難しい立場に立たされていることを実感いたしました。それでは最後の質問です。近藤長官にお答えいただき、最後のまとめもしていただきたいと思います。20代の小学校の先生からの質問です。「美術と教育を考える会」の皆様は美術を通してコミュニケーション能力を育てることを掲げておられますが、確かに日々の授業の中で子どもたちが関わりあう場面が多くあります。「コミュニケーション能力を育てる」と、美術とのつながりについて、もう少し詳しくお話いただけないでしょうか？

近藤：はい。本日の内容をまとめるのは非常に難しいので、今の質問に答えながら私の感じたことをお伝えしたいと思います。まずは、私たちの社会において、美術ないし芸術の素晴らしい力が豊富にありながら、それが社会で使われていないという共通認識がありました。だからこそ美術と教育について、どう前に進めるかということですが、日比野さんのおっしゃられたキーワードは「美術は進化しない」ということでした。しかし科学はどんどん進化していく。ですので、教育の現場では進化していく科学の新しい知識を与え続けていかなければ社会が進化していきません。しかし、美しいものを見て感動する心はもともと持っているものですから、それを教える必要はない。大切なことは、それをどのように引き出してやるかということ。子どもが持っている潜在的な力をどのように引き出してやれるかということがポイントだったと思います。し

かし今の学校のカリキュラムですと音楽も図工も週に1、2時間ということでした。コミュニケーションを高めるといことになりましてそれではとても足りません。ですから、家庭、職場、地域、そして美術館といった社会全体でこの問題を捉える必要があるのだと思っています。この問題は学校だけに頼っていたのでは無理だと考えています。10年20年先の人間を作っていくという問題については、芸術の力が非常に重要であることはこちらにいる皆さんが共通して持っている思いではありますが、この「美術と教育を考える」といことになりまして、やはり学校の教育現場だけに任せることは不可能だと考えています。ただ、先程お話にも出ておりましたが、教育の中で地方においては美術の専門ではない先生が美術を教えているという現実があります。つまり、先生自身がコミュニケーションというものの重要性を認識していないまま子どもたちに教育を与えているということです。ですから、美術の授業においても他の学科と同じように知識を教える、技術を教える内容になっている現実があるということです。また、それが美術嫌い、芸術嫌いを引き起こしている可能性があるということです。この問題は、行政の複雑な仕組みと予算の問題があり、簡単に解決していくことは難しいと考えています。もちろん父兄の多くは、美術だけやっても進学には関係ないという発想なので学校という現場で解決していくことは難しい問題を含んでいます。ですから学校の教育現場における、「美術の教育」というのは非常に制約があるのだと思っています。しかし、実際には泰明小学校の高村先生のような美術の先生がいらっしゃるように、少しでも意識の高い美術の先生を増やしていくことが学校現場における美術教育の質の向上には大切なことだと思います。何かもう少し、生徒とのコミュニケーションを美術で進めていくにはどのようにしていくのかという研修をするなど、先生の質の向上のために、何かできることがあるのではないかと考えています。

いずれにしても、美術に対して「わかる、わからない」とか、「僕はアートのことはわからないんですよ」という話をされる方が多いのですが、美術というのは「わかる、わからない」ではなくて面白いかどうか、ということだと思います。本当は点数をつける必要もないのですが、わかるということよりも、面白いということで興味を持っていくことの方が重要であると感じています。先程高村先生が評価にあたり、ポイントをいくつか挙げておられておりましたが、本当は子どもたちとの対話の中で全員に良い点をつけてあげたいのだと思います。評価については、現場の先生方の創意工夫が求められます。この美術の評価については、少し考えていく必要があるのかもしれない。

さて、コミュニケーションについての質問がございました。日本人はコミュニケーションについて専門的に訓練する場がないと思っています。学校においても家庭においても、親と教師が知識

を与えようとするばかりで、子どもの能力を引き出すことがされていないからだと思います。子どもも自分が思ったことを、まとめて、表現して、周りを説得するという経験を積んでいくことが重要なのだと思っています。また、親も教師も子どもの意欲を引き出していくことが重要であることは、美術に限らず国語でも数学でも同じことだと思いますが、今の日本社会においてはファシリテーターという考え方がまだまだ不十分なのだと思います。

先程上野先生がニューヨークで経験されたMOMAでの美術作品を通じた鑑賞についても、ファシリテーターの方が参加者に興味を持って質問をしていくことから、様々なコミュニケーションが生まれてくるのであって、それは家庭においても学校現場においても親や教師が子どもに関心を持ち、質問を投げかけ、それを受け止めることで子どもとの信頼関係が生まれ、意欲が生まれ、コミュニケーションが生まれるのだと思います。ですから、国語や数学といった科目よりもコミュニケーションが生まれやすいのが美術であり、美術と教育を考えた時に子どもとのコミュニケーションを大切に考えるのが良いのであり、先生方がそのことを常に念頭に置かれるのが望ましいと考えています。

最後になりますが、先程もご紹介させていただきましたが、今ここで議論させていただいている「美術と教育」ですが、これは「音楽と教育」「演劇と教育」「古典芸能と教育」といった様々な他の芸術分野においても同じ課題になっております。もし、来年もこの活動を続けていかれるのであれば、提案ではありますが異分野の方も入れていかれることで、新しい発見もあるのではないかと考えております。7月16日、文化庁主催で開催する「アートで子どもたちの才能を引き出す」シンポジウムも、今お話しした各分野の方に来ていただいて行う初めての試みです。こちらの方にも、ぜひご参加いただき参考にさせていただければと考えています。

野呂：近藤様ありがとうございました。7月16日のシンポジウムにはぜひ参加させていただき、参考にしたいと考えています。それでは第2回「美術と教育を考える会」を閉会とさせていただきます。長時間にわたりご清聴いただき皆様ありがとうございました。